

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13191

研究課題名（和文）中国語のモダリティにおける接続詞・談話標識への転成：構文化と言語類型論の観点から

研究課題名（英文）On the development of Chinese modals into connectives and discourse markers:
Constructionist and typological perspectives

研究代表者

朱 冰 (ZHU, Bing)

九州大学・言語文化研究院・助教

研究者番号：30827209

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまでのモダリティの文法化に関する言語類型論の研究では十分に重要視されてこなかったモダリティ表現における更なる発達に焦点を当て、接続詞と談話標識への拡張変化に研究対象を絞り、中国語のデータに基づいて考察を行った。複数のケーススタディに基づき、言語類型論と構文文法の観点から、中国語のモダリティ表現における接続詞・談話標識への転成の諸相及び拡張の動機づけを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モダリティとほかの文法カテゴリーの架け橋となる本研究は、これまでのモダリティの文法化研究に対する強力な補足であり、さらなる発展でもある。本研究によって、モーダル機能とほかの文法機能との連続性および共通基盤を解明し、モダリティの多機能性に対する認識をいっそう深めるのみならず、その背景にある人間の認知能力の発達の解明やモダリティの習得研究・教育に対しても重要な示唆を与えることができる。また、本研究は、印欧語中心であったモダリティの研究に積極的に中国語のデータを取り入れ、言語類型論研究におけるアジア言語からの重要性を示すものでもあり、と考える。

研究成果の概要（英文）：The current study focuses on the further development of modal expressions, especially the expansions towards connectives and discourse markers. Based on several case studies of Mandarin Chinese, the process and motivation of such expansions have been discussed from typological and constructional perspectives.

研究分野：認知・機能主義的言語学

キーワード：モダリティ ポストモーダル 接続詞 談話標識 中国語 文法化 主観化 間主観化

1. 研究開始当初の背景

モダリティの成立・通時的变化を追究するモダリティの文法化研究は、通言語的に普遍的な変化経路の解明を中心に生産的に行われている (Bybee et al. 1994, van der Auwera & Plungian 1998, Narrog 2012 など)。これまでの研究では、機能語であるモダリティ表現の成立および典型的なモーダルの意味間の変化 (例: 英語の must における義務・必要性の意味から認識的必然性の意味への拡張) に関心が寄せられ、多大な成果を挙げてきた。

一方、モダリティ表現は、条件節マーカーや譲歩節マーカーといった節連結機能を獲得する現象も文法化の後期段階においてしばしば観察される (例: “He may be a university professor, but he sure is dumb.” 「(確かに) 彼は大学教授かもしれないが、愚か者だ。」において may の認識的可能性の意味の希薄化により得られる「譲歩」の用法)。このような典型的なモーダルの意味から逸脱する現象は、ポストモーダルへの拡張と呼ばれ、モダリティの通時的变化における重要な一部分であり、モダリティの多機能性に対する認識を深めるために、おろそかにできないものである。ところが、先行研究では個別現象に関する報告は散見されながらも、ポストモーダルへの拡張に焦点を絞った体系的な研究は遅れている。

また、豊富な古代語・現代語の資料と電子コーパスを持つ中国語は、他言語に観察されない重要な言語事実を提供する可能性が高く、モダリティの通時的变化に見られる言語間の普遍性と多様性およびモダリティの多機能性を解明するために言語類型論の観点からも大いに貢献できると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は申請者がこれまで構築してきたポストモーダルへの拡張の体系を踏まえ、構文化と言語類型論の観点から中国語のモダリティにおける接続詞・談話標識への転成に対する包括的な分析を通じて、モダリティにおける典型的なモーダル領域から複文 (節連結)・談話の領域への機能拡張を動機づける要因を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は主にコーパス調査に基づいて考察を行った。具体的に、CCL コーパス (北京大学中国語言語研究センターコーパス)、CallHome 電話会話コーパスなどの電子コーパスを利用してデータを抽出し、分析を行った。

モダリティ表現における接続詞への転成について、主な拡張経路を整理した上で、「禁止」から「尺度添加」への拡張例として接続詞「别说」の成立を詳細に分析した。モダリティ表現から談話標識への転成について、「当然」の談話機能を中心に考察を行った。さらに、(問) 主観化の観点から、中国語のモダリティ表現の接続詞化と談話標識化に見られる意味・機能変化について分析を行った。

4. 研究成果

本研究は主に次のような成果を得た。

(1) 中国語のモダリティ表現における接続詞への転成について、主に次 ~ のような拡張経路が同定された。

束縛的必然性「～しなければならない」(例: 必須、要) > 必要条件「～してはじめて」
認識的必然性「～はずだ」(例: 要) > 条件「～たら」
認識的可能性「～かもしれない」(例: 可能) > 譲歩「～にもかかわらず」
禁止(例: 别说「～言わないで」、别提「～触れないで」) > 尺度添加「～は言うまでもなく」
禁止(例: 别看「～見ないで」) > 譲歩「～にもかかわらず」
禁止(例: 别管「～気にかけないで」) > 譲歩条件「～であろうとなかろうと、どんなに～であろうとも」

(2) 法助動詞(節)から談話標識への転成について、法助動詞“当”と指示詞“然”の組み合わせに由来した“当然”の談話機能を中心に考察を行った。本研究は、書き言葉に注目した従来の研究と異なり、自然会話における“当然”の振る舞いに注目し、その相互行為上の機能を分析した。分析

の結果、“当然”は話し手と聞き手のフェイスへの侵害を和らげる役割があり、face-threat mitigator の機能を認めるべきだと主張した。

さらに、“当然”の face-threat mitigator の機能は、補足情報を導入するというテキスト的機能をベースとしたものと考えられることから、Ghesquière et al.(2012)が提案した間主観性に対する分類に従えば、談話標識としての“当然”は態度的間主観性 (attitudinal subjectivity) とテキストの間主観性 (textual subjectivity) を持ち合わせていると主張した。

(3) 本研究で取り上げられたモダリティ表現の接続詞化と談話標識化という現象は、Narrog (2012) が提案する意味変化における普遍的な方向性にうまく適合していると考えられる。つまり、モダリティにおける意味変化は、モダリティの文法化の後期段階において基本的に談話・テキスト自体にリンクする意味機能の発達方向に進んでいる。特に、中国語の禁止表現や日本語の命令表現といった間主観性が顕著に表れている表現から接続詞への拡張変化は、「非主観的意味 > 主観的意味 > 間主観的意味」という(間)主観化の一方方向性仮説 (Traugott 1995, 2003, 2010) によってうまく説明できないことから、テキスト機能の発達を独立した拡張方向であると見なす Narrog (2012) の妥当性が改めて確認された。

また、Ghesquière et al.(2012)が提案した間主観性に対する分類(態度的間主観性、応答の間主観性、テキストの間主観性)は、接続的機能または談話標識機能を獲得した中国語モダリティ表現の機能分布を分析する際、有益な示唆を与えていると確認できた。

【参考文献】

- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca.(1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Ghesquière, Lobke, Lieselotter Brems and Freek Van de Velde. (2012) Intersubjectivity and Intersubjectification: Typology and Operationalization. *English Text Construction* 5 (1) , pp. 128-152.
- Narrog, Heiko. (2012a) *Modality, Subjectivity and Semantic Change: a Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth C. (1995) Subjectification in Grammaticalisation. In Dieter Stein and Susan Wright (eds.) , *Subjectivity and Subjectification*, pp. 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. (2003) From Subjectification to Intersubjectification, In Raymond Hickey (ed.) , *Motives for Language Change*, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. (2010). (Inter)subjectivity and (inter)subjectification: a reassessment. In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte and Hubert Cuyckens (eds.), *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, 29-71. Berlin: Mouton de Gruyter.
- van der Auwera, Johan and Vladimira A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2 (1) , pp. 79-124.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 朱冰・堀江薫	4. 巻 15
2. 論文標題 命令・禁止表現から接続表現へ - 日中語における（間）主観化とテキスト機能の発達 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨正明（編）『認知言語学論考』	6. 最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朱冰・堀江薫	4. 巻 1
2. 論文標題 意味論・語用論と言語類型論のインターフェイス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 米倉よう子（編）『意味論・語用論と他の分野とのインターフェイス』	6. 最初と最後の頁 27-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朱冰	4. 巻 24
2. 論文標題 対話語体中“条件小句+VP+NE?”小句的話語機能	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY HUMANITIES REVIEW	6. 最初と最後の頁 173-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 ZHU Bing
2. 発表標題 From intersubjective to textual meaning: On the development of the connectives derived from prohibitives in Mandarin Chinese
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朱 冰
2. 発表標題 構文ネットワークから見た中国語における禁止表現から接続詞への転成
3. 学会等名 九州中国学会第68回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Zhu, Bing
2. 発表標題 On the Chinese insubordinate conditional clause formed by the particle NE: A constructionist perspective
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関